ふらんすの女

岸田國士

マダム用応接間にて

——あなた、旦那さんのどういふところに、一番感心してゐらつしやる？

——上手に嘘をつくところ。

——…………？

——あの人の嘘は、それや嘘らしくないの。だから、騙されてゐながら腹は立たないの。

或る日の朝

——出て行けったら出て行け。

——出て行きますとも……後悔するんぢやありませんよ。

——後悔なんかするもんか。

——もう後悔してるくせに……。

海岸にて

——ねえ、あなた、あたしを愛してる？

——うむ、愛してるよ。

——たくさん？

——うむ、たくさん。

——きつと？

——うむ、きつと。

——こんだ、あたしに訊（き）いて頂戴。

——なんて？

——あなたを愛してるかどうか。

——ぢや、お前、僕を愛してるかい？

——えゝ、愛してるわ。

——どれくらゐ？

――これくらゐ…………（接吻しようとする）

――まあ、待つてくれ。言葉でさ。

――言葉で…………ぢや、死ぬほど。

――………？

――…………！

――どつちが？

波止場にて

――ぢや、六ヶ月ね、きつと？

——大丈夫だよ。それより長くなるやうだつたら呼び寄せるから…………役所の方にもその話はしてあるんだ。

——六ヶ月でも永いわ。（ハンケチを眼にあてながら）それ以上待たせたら、どんなことになるか、あたし保証しないことよ。

——（心の中にて）神よ、われを護り給へ。

劇場の廊下にて

――細君は？

――細君は旅行中だ。

――………？

――例のと一緒にさ。

――………？

――吾輩かい…………？　君、吾輩のボツクスを見なかつたかい？

サロンにて

――君の近作を読んだよ。大したもんだね。

――さうか。奥さんはいかゞです。読んでくださいましたか。

――えゝ、拝見しましたわ。あなたの詩は、あなたほど面白くないのね。

――ひどいなあ。

――あたしたちにはよ。

地下電車（メトロ）の中にて

――さ、どいて下さい。それは車掌専用の腰掛けです。

――君が立つてゐる間だけ借りたんだよ（しぶしぶ立ち上る）

――一寸の間、ね、いゝでせう（腰かける）

――いけません、それや………。

――（腰かけたまゝ）今日はね、ムウドンの親戚へ用があつて行つたんだけれど、行きも帰りも立ちどほし……くたびれちやつた。

――わたしも立ちつゞけです。

――ほんとにね、車掌さんも楽な商売ぢやないわね。

——好きでやつてるんぢやありませんや。

——あたしだつて好きでメトロなんかへ乗るもんですか。

——（もぢもぢしながら）どこまでおいでゞす。

——終点までよ。（間）あんたは、何時だつて腰掛けられるぢやないの。

電車の停留場にて

——また満員らしいわ。

――こら、びしよびしよ、あたしの帽子、あなたのも……。

――足が凍えさうね、あたし、泣きたい。

――アルマ、アルマ、アルマ……お降りの方はありませんか。はい、お早く……二等は満員……一等お二人さんだけ……。

――（片足を踏段にかけたまゝ）どうする？

――もう一台待ちませう。

公園のベンチにて

――あなた、あたしの許嫁をどう思つて？

――どうとは？

――かう、見たとこ……。

――さうね、しつかりした方ね。

――それだけ？

――でも、優しさうだわ……妬くわよ。

――だあれ、あの人？

――…………！

――（夢みるやうな微笑）さうか知ら。

或る日曜の午後

——ジャン、あたしも連れて行つて。

——駄目だよ、お前なんか……すぐ泣いちまふから……。

——今日はきつと泣かない。うそだつたら百度接吻してあげるわ。

——いらないやい、そんなもの。来るんぢやないよ。アンリエツト。今日は男の子ばかりで遊ぶんだから……。

――男の子ばかり……つまらないぢやないの、女の子も、一人ぐらゐゐなくつちや……。

庭の一隅にて

――まあ、お嬢さまがた、こゝにいらしつたんで御座いますか。あの、奥様がお召しでいらつしやいます。

――だあれ、来てるのは。

――だれつて、訊かなくつてもわかつてるぢやないの。

――御存じなんでございませう。

――姉さん、行つてらつしやいよ、姉さんに用があるんだから……。

――うそばつかし……。いや、あんたも来なくつちや。

――あたしはいや。

――ぢや、行かない。

――もうお帰りになるところで御座いますよ。

――姉さんは行かないのね。そんなら、あたしが行くわ。

商館の売場にて

――Bちやん、いゝわね、一寸、あのスタイル。

――誰かさんに似てやしないこと、どうせ。

――むろん。

――あ、お腹が痛い。（急に）は、手袋でございます

か、お安いところを、ビヤン・ムツスイウ！

ギャルソニエールにて

――よく来て下さいましたね。

――来たわ、また棄てられる気で……。

――寃して下さい。

――そんなこと云ひつこなし。あなた、ちつとも変らないのね。

――心だけは入れかへました。

――このつぎ入れかへるまで、可愛がつて頂戴。

――いやだなあ。

――また「いやだなあ」が始まつたわね。（間、いきなり立ち上り）何か飲まして……。

雨の夜

——ねえ、アンリイ、一寸こゝへおいで。

——また「お祖母さんが若い時には……」だらう。

——なるほど、お前たち若いものに、若い時分の話でもあるまい。……といつて、今のお祖母さんに、どんな話ができやう。

××にて

――あたしの宝……あたしの愛……あたしのキャベツ……あたしの好きな好きな、いとしいいとしい人……あたしの狼……あら、いや、そんないたづらをしちや……豚！

之を要するに

――（夫の靴下を編みながら）それで、あなた方は、

どうしようつておつしやるの。

――だから、われわれ女は、力を併せて、男の圧制から脱しなければならないのです。

――圧制つて、どんなこと。

――（靴下をちらと横目でにらみ）女を自分の都合のいゝやうに作り上げたことです。

――それはお互ひぢやないの。

――とにかく、われわれは、すべての点で、男の位置まで自分たちを引き上げなければなりません。

――（眼を編棒の先からはなさずに）おや、男つて、そんなにえらいもの？

底本：「岸田國士全集19」岩波書店
1989（平成元）年12月8日発行
底本の親本：「言葉言葉言葉」改造社
1926（大正15）年6月20日発行
初出：「女性　第六巻第四号」
1924（大正13）年10月1日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：tatsuki
校正：門田裕志
2009年9月5日作成

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。